ひまわりのひみつ

気仙沼・鹿折　三年　館山　慶

（現五年）

三月十一日、東日本大しんさいで、気仙沼は大きなひがいをうけました。とくに鹿折は、火さいが発生し、また、小学校も津波でしん水したため、今も一階の教室は使えません。しんさいのショックや、仲良しだった友だちが次々と転校してしまい、わたしは、かなしくて、ふ安な気持ちでいっぱいでした。

わたしの気持ちをふ安にさせたもう一つの理由は、いつも家でわたしたちの帰りをまっていてくれたお母さんが、四月から仕事のため、昼間、家にいなくなってしまうことでした。

（また大きな地しんがきたら、お母さん、すぐに迎えに来てくれるかな。お母さんと会えなかったら……。）

と考えるだけで、どうしよう、どうしよう、という気持ちがずんずんと大きくなって、泣きたくなってきます。そんなとき、お母さんは、

「すぐにむかえに行けないかもしれないけれど、お母さんはかならずむかえに行くから、それまでは、先生の言うことをよく聞いておりこうにまっているんだよ」

と言って、わたしのふ安な気持ちをいやしてくれます。

一学期がはじまって一か月がすぎたある日、「ただいまあ。」

と、いつものようにお母さんが帰って来ました。

「おかえり。」

と言って、だきつこうとすると、白いふくろをこれなんだ、と言うように高く上げてもっていました。

「何。」

と聞くと、お母さんは、ふくろの中が見えるようにひろげて、

「ひまわりのなえ。いただいたの。庭にうえようね。」

と言いました。ふくろをのぞいて見ると、小さなひまわりのなえが、三本入っていました。

お姉ちゃんも帰って来て、わたしたちは、三人でひまわりをうえました。

早くひまわりが大きくなるようにと、毎日水をあげたり、話しかけたりしました。さみしいときやふ安なときは、ひまわりを見ながら、

（大じょうぶだよ。）

と、心の中でつぶやきます。そうすると、何だかお母さんが近くにいるような気がして、ふしぎと気持ちがおちつくのです。

小さかったひまわりは、いつの間にか、わたしの背より高くなり、今では三メートルほどになりました。

さて、わたしは、ひまわりを見ているうちに、あることに気づきました・朝、東を向いていたひまわりが、夕方になると、西を向いているのです。

（あれ。ひまわりって、お日さまとおいかけっこするように動くんだ。）

と思い、花がさくのを、うきうきしながらまっていました。

緑色だったつぼみが、だんだん黄色になってきたある日の朝、

「けい、ちょっと来てごらん。」

とお母さんによばれました。外に出てみると、ひまわりがさいていました。

「わあ、さいたね。」

わたしは、とびはねてよろこびました。とってもかわいくて、何だか、

「おはよう。今日も暑くなるよ。」

と言っているみたいでした。

ひまわりは、太ようの動きにつれて、その方向をおうように花がつ回るということから、その名前がついたそうです。えい語ではサンフラワーといい、まさに太ようの花です。

ところが、うちのひまわりは、ちょっとちがいました。花がさいたとたん、東を向いたまま、動かなくなってしまったのです。

（えっ、東を向いたままなの、お日さまといっしょに動くんじゃないの。）

うちのひまわりはへんだと思いました。

調べてみると、せい長しているときは、太ようといっしょに回っていても、せい長が止まり、花がさくと、ほとんど東を向いて動かなくなることが分かりました。

お日さまとおいかけっこをしているひまわりの花を見たかったわたしは、何だか、ひまわりにうら切られたような気持ちになり、すごくがっかりしました。

ある日、ひさいしたろう人ホームの庭に、一れつにうえてあるひまわりを見つけました。

そのひまわりは、夕方なのに、全部東を向いてさいていました。（やっぱりか。）

と思いました。でも、一れつに、同じ方向を向いてさいているひまわりは、一生けん命、力を合わせてさいているように見えました。まるで、今のわたしたちといっしょだなあと思いました。お母さんと二人で、

「かわいいね。」

と言って、はく手をしながらわらいました。

今年のひまわりのたねを、大事にしゅうかくして、来年は、たねから育ててみたいと思います。来年も、また、きれいな、大きな花がさきますように。

出典：作文宮城６０号特別編「あの日の子どもたち」―２０１１・３・１１東日本大震災記録集―宮城県連合小学校教育研究会国語研究部会編